

坂本 諏訪獅子

権九郎獅子 中馬街道を来る

三河と恵那郡を結ぶ街道に伊那街道がある。中馬街道と言う。根羽から街道を離れ、高波・明智を通り、岩村より中山道にでる。

当地に伝わる獅子は、この道を通ってやって来たのである。この獅子は権九郎獅子と呼ばれる頭で黄金塗りの神楽堂と共に三河で買い、馬で三日をかけて運んで来たと言われている。



祭が近づくとつれ練習に熱が入る

元文五年（一七四〇）頃、新三郎と言う人物が伝授し、諏訪神社に奉納したとの言い伝えはあるが、定かではない。

祭りの準備

この諏訪神社は式内社坂本神社であるが、坂本八幡神社にも坂本神社の石碑があり、長年の論争に結論が出ず現在に至っているが、今では坂本神社諏訪社と称



古老から青年へ、青年から子供たちへと伝承されていく

している。

この諏訪地区に伝わる権九郎獅子は雌獅子であり優しい顔立ちをしている。初めは少ない戸数で守っていたが明治三十年頃戸数が増えたため西諏訪東諏訪に別れ、その後も西諏訪一・西諏訪二と別れて、三つの組で年毎に当番を決め獅子舞を演じて来た。しかし舞や、楽屋方の指導など不便な点もあり、保存会を結成しこれに当たる事となった。

祭りが近づくと同関係者が集会場に集まり、小中学生を集め練習に参加させ、翌年から理解しやすい様にし、選ばれた者が神前で舞う事となる。

舞うのは小学校高学年か中学生の男子で、指導は舞手の成年層が当たり、「楽屋」と呼ばれる笛・太鼓を受け持つ者と一団となって練習を行う。

太鼓は唄を歌いながら叩き、舞手は女性用の着物を着て白足袋を履き、獅子頭を手に持って舞うのではなく頭にかぶり舞う。獅子頭をかぶった踊り子の後ろに幌を「より棒」によって高く掲げる道化が付く。

祭り本番

祭りの当日、神楽堂に獅子頭を納め、刀・鈴・幣・より棒など持参し、拝殿まで担いで上がる。

まず「幕さばき」から始まり「剣抜き」「鈴の舞」「幣の舞」「ねらい」の順番に舞われ、続いて二番手の舞い手が「剣抜き」を舞わず、同じ様に繰り返す、その後、拝殿の下の広場へ移動し余興獅子と称してまた三回舞う。戦前は余興獅子として歌舞伎仕立ての獅子芝居を行っていたが、今は伝承が途切れ上演する事はない。

これは三河の国の千万町神楽から伝わったとも言われており、千万町獅子と非常に似ているといわれているが、最近日本海側から伝わった獅子舞ではないかとの見解があり、研究者の話では中津川の獅子舞では最も古い形態の獅子舞であるとの事であった。

『幕さばき』が舞われ、祭が始まる



神事

「幕さばき」は獅子の幌を手で持つて舞うものであり、「剣抜き」は悪魔を祓うという唄に合わせ、刀と鈴を持つて舞い、諸悪を追い払う意味がある。続いて鈴と幣を持ち「鈴の舞」が三度舞われ、「幣の舞」が行われる。この舞は、「われえは さはえてたうえばの…」と唄われるところから「われわさ」と呼ばれ、「丹波の鳥刺しの娘が四十雀を見

事に刺してお目にかけてましよう」と言う内容で、その様子が舞となっている。最後に「ねらい」が舞われるが、獅子が悪魔を取って喰うべく、何度も狙いをつけて一気に食べてしまうと云うものである。

この諏訪神社の祭礼には、獅子舞の後、紙花を鞆いっばいに着けた花馬が馬場を走り廻り、観客が花を奪いあつたが現在は花神輿が代わりに走り、花を奪いあう、賑やかな祭りとなる。